

寺田寅彦

病室の花



病室の花

発病する四五日前、三越^{みつこし}へ行つたついでに、ベコニアの小さい鉢^{はち}を一つ買って来た。書斎の机の上へ書架と並べて置いて、毎夜電燈の光でながめながら、暇があつたらこれも一つ写生しておきたいと思つていたが、つい果たさずに入院するようになった。

入院の日に妻がいろいろの道具といつしよにこの鉢を持って来た、そして寝台のすぐ横にある大理石を張つた薬びん台の上に載せた。灰色の壁と純白な窓掛けとで囲まれたきりで、色彩といえばただ鈍い紅殻^{べにがらぬ}塗りの戸棚^{とだな}と、

寝台の頭部に光る真鍮しんちゆうの金具のほかには何も無い、陰鬱いんうつに冷たい病室が急にあたたかくにぎやかになった。宝石で作ったような真紅のつぼみとビロードのようにつやのある緑の葉とを、臥ねながら灰色の壁に投射して見ると全く目のさめるように美しかった。

いつでも思う事ではあるが、いかに精巧をきわめた造花でも、これを天然の花に比べては、到底比較にならぬほど粗雑なものである。いつかアメリカのどこかの博物館で、有名な製作者の造ったというガラスの花を見たが、それも天然の花に比べてはまるで話にならぬほどつまら

ない、しかもいやな感じのするものであった。このような差別の根原はいったいどこにあるだろう。色彩や形態に関するあらゆる抽象的な概念や言葉を標準にして比較すれば造花と生花の外形上の区別は非常に困難な不得要領なものになってしまふ。「一方は死んでいるが他方は生きている」という人があるかもしれない。しかしそれはただ一つの疑問を他の言葉で置き換えたに過ぎない。実際の明白な区別は、やはり両者を顕微鏡で検査してみ始めて始めてわかるのではあるまいか。一方はただ不規則な乾燥したそして簡単な繊維の集合か、あるいは不規則な

凹凸おうつとつのある無晶体の塊かたまりであるのに、他方は複雑に、しかも規則正しい細胞の有機的な団体である。美しいものと、これに似た美しくないものとの差別には、いつでもこのような、人間普通の感覚の範囲外にある微妙な点があるのではあるまいか。人間でも意識の奥に隠れた自己といったようなものが、その人がらの美しさを決定する要素ではあるまいか。こんな事を考えながらベコニアの花をしみじみ見つめていると、薄弱な自分の肉眼の力ですら、花卉の細胞の一つ一つから出る生命の輝きを認めるような気もする。

入院の翌日A君が菜の花を一束持って来てくれた。適当な花瓶かびんがなかったからしばらく金盥かなだらへ入れておいた。室咲きであるせいか、あのひばりの声を思わせるような強い香がなかった。まもなく宅うちから持って来た花瓶にそれをさして、室へやのすみの洗面台にのせた。同じ日に甥おいのNが西洋種の蘭らんの鉢はちを持って来てくれた。代赭色たいしやいろの小鉢に盛り上がった水苔みずごけから、青竹篋あおたけべらのような厚い幅のある葉が数葉、対称的に左右に広がって、そのまん中に一輪の花がやややうなだれて立っている。大部分はただ緑色で、それに濃い紫の刷毛目はけめを引いた花冠は、普通の意味では

あまり美しいものではないが、しかしそのかわりにきわめて品のいい静かに落ち着いた美しさがあつた。これを、花やかに美しい、たとえばおとぎ話の王女のようなベコニアと並べて見た時には、ちようど重々しく沈鬱ちんうつなしかも若く美しい公子でも見るような気がした。花冠の下半にたれた袋のような弁の上にかぶさるようになった一片の弁は、いつか上に向き直って袋の口を開くだろうと思つていたが、とうとういつまでも開かなかつた。

そのうちにT君夫妻がまた大きなベコニアの鉢はちを持って来てくれた。それは宅うちから持つて来たのに比べて数倍

大きくみごとなものであった。この花が来てみると今までであったベコニアは急に見すばらしい見る影もないものになってしまった。宅のは花の色ももう実際にいくらか薄くなったのだろう、これに比べて見ると今度のは全く目のさめるようにあざやかであった。古いほうのは室へやのすみの洗面台の上にやってしまった、この新しいベコニアを枕まくらもとに飽かずながめた。しかし不思議な事には蘭らんのさびしい花はこれに比べてもちつとも見劣りがしないのみか、かえって今までよりも強くこの花の特徴を主張するかと思われた。古い小さいベコニアはそれでも捨て

るのは惜しかった。自分は時々頭をねじ向けて洗面台の上
に目をやって、花も葉も日々に色のあせて行く哀れな鉢
鉢を見ないではいられなかった。さびしい花瓶かびんの菜の花
もそのたびに淡いあわれの情趣を誘うた。

今度はI君がサイクラメンとポインセチアを届けてく
れた。ポインセチアはこれまで花屋で見かけた事はある
が、名はそれまでは知らなかった。もらった鉢にさして
ある木札で始めて知った。薬びん台に載せて始めてよく
見ると、葉鶏頭に似た樹冠の燃えるような朱赤色は実に
強い色である、どうしても熱帯を思わせる色である。花

よりはむしろ鳥類の飾り毛にでもふさわしい色だと思
う。頂上を見ると黄色がかつた小さい花が簇生ぞくせいしている
が、それはきわめて謙遜けんそんな、有るか無きかのものである。
いったい自然はどうしていつもの習慣にそむいてこの植
物の生殖器をこんなに見すばらしくして、そのかわりに
呼吸同化の機関たる葉をこれほどまでに飾つたのだら
う。植物学者や進化論者に聞いたら何かの学説はあるか
もしれないが、それにしても不思議な心持ちがしないで
はいられない。自分はこのような植物の茂っている熱帯
の樹林を想像しているうちにシンガポールに遊んだ日を

思い出した。椰子やしの木の森の中を縫べにがらいろう紅殻色の大道に馬車を走らせた時の名状のできない心持ちだけは今でもありあり胸に浮かんで来るが、細かい記憶は夢のように薄れて、ただ緑と赭あかの地色の上に染め出された更紗さらさ模様のように混雑してしまっている。それでもこの寒く冷たい寢床の上で、強烈な日光と生命のみなぎった南国の天地を思うのはこの上もない慰藉いしやであった。

サイクラメンのほうは少し生育が充分でなかった。花にもなんだか生氣が少なく、葉も少し縮れ上がって、端のほうはもう鳶色とびいろに朽ちかかっていた。自分はこの花に

ついて妙な連想がある。それはベルリンにいたころの事である。アカチーン街の語学の先生の誕生日に、何か花でも贈り物にしたいと思つて、アポステル・パウルス・キルへの前のけちな花屋へ寄つて、あれかこれかと物色した末に買ったのがこの花であつた。日本から輸入されたりらしい桃色のちりめん紙で鉢はちを包んでもらつて、すぐその近所の先生の宅うちへ持つて行つた。その時に先生がこれはアルペン 堇フアイルヘン という花だと教えてくれた。そのせいでか自分にはサイクラメンという名前よりこの名のほうがなんとなくふさわしいような感じがする。あの女先

生はその後どうしたのか。日本の留学生ばかりを弟子でしにして生活していたのが、大戦の爆発と共に留学生は皆引き上げるし、同時に日本人に対する市民の反感が高まった時に、なんらかのいやな経験をしたのではあるまいか、その後の生計をどうして立てて行つたろうか。これは何かのおりには時々思い出す事であつた。先生は結婚後まもなく夫のドクトルに死なれ、退役軍人の父親と、夫の忘れがたみで、当時十四ぐらいであつた娘のヒルデガルトと二人でさびしく暮らしていた。よくはわからぬが父親とはあまり仲がよくないらしかった。ある日われわれ

お弟子^{でし}仲間二三人でこのヒルデガルトを連れて、ルイゼン座のおとぎ芝居を見に行つた事がある。芝居は「雪姫」であつた。観客の大部分は無論子供であつたので、われわれ異国の大供連はなんだか少しきまりが悪いようであつた。王妃に扮^{ふん}した女優は恐ろしく肥^{ふと}つた女であつたが、美しい声で「鏡よ鏡よ」を歌つた。それから二三日たつて聞いてみると、ちようどその晩に先生は激烈な腹部の痙攣^{けいれん}を起こして大騒ぎをしたとの事であつた。先生の目の周囲には青黒い輪が歴然と残つていた。自分はなんと
いう理由なしに、この病気を起こさせた責任が自分らに

あるような気がしてしかたがなかった。とにかくおとぎ芝居へ行つたのはただあの時一度だけであつた。

五歳になる雪子ゆきこが姉につれられて病院へ見舞いに来た。始めのうちはおとなしくして看護婦の顔ばかり見て黙っていたが、だんだんに慣れて来て、おしまいにはとうとう寝台の上まで上がり込んで来た。そして枕まくらもとの花鉢はなばちをのぞき込んで、葉陰にかくれた木札を見つけ、かなで書いた花の名を一つ一つ大きな声で読み上げた、その読み方がおかしいので皆が笑つた。近ごろかたかなを覚えたものだから、なんでもかたかなさえ見れば読ん

でみなくてははいられないのである。それから後は来るたびごとに寝台にすわりこんで、この花の名を読まない事はなかった。自分は今さらのように「文字」というものの不思議な意味を考えさせられ、また人間の知識の未来というような事についてもいろいろの事を考えさせられた。

ポインセチアとはいったいどうつづるのか知りたいと思っていた。偶然丸善まるぜんから取り寄せた「近世美術」を見たら、その中にロージヤ・フライという人がこの花を主題にして描いた水彩があったのでそれがわかった。こ

の絵に付した解説にこんな事が書いてある。「この絵はほんとうに特徴のスタデイと呼ばれるべきものである。物をそのままに見て、そして偏見なしに描こうとする近代の試みの好適例であるうんぬん。」壁に布切れやしわくちゃの紙片をだらしなく貼はりつけたのをバツクにして、平凡な牛乳びんに二本のポインセチアが無む雑ぞう作さに突きさしてあるだけである。全体の感じはなるほど悪くないが、今枕まくらもとにある本物と比べて見ると、どうもなんだか葉の排列のしかたがおかしい。植物学者の目で見ればこれは確かに間違っている。しかし前の解説を書いた美術

批評家は上のような賛辞を呈している。この批評家のいっている事はずいぶんいいかげんのようにも思われるが、また考え直してみるとほんとうのようにも思われた。

看護婦は毎朝これらの花鉢はなぼちを室外へ持ち出して水をやってくれた。そのたびごとに廊下でだれかが「マアきれいな花ですこと」ときょうさんらんにほめる声が聞こえた。ベコニアや蘭らんの勢いのいいのに比べて、ポインセチアは次第に弱るように見えた。まっすぐに長い茎のまわりに規則正しい間隔をおいて輪生した緑の葉がだんだんに黄色色に変わって来るのであった。水をやりすぎるため

はないかと思われたから看護婦にも妻にもそう注意した。しかし積極的にさしずをするだけの知識はないからそのままに任せておいた。そのうちに葉は次第につやが無くなり、黄みが勝って来て、とうとう下のほうの葉が一つ二つ落ち始めた。残った葉もほんのちよつと指先でさわるだけでもろく落ちるのであった。何かしら強い活力で幹から吹き出しているように見えた威勢のよかった葉がきわめてわずかな圧力にも堪えず、わけもなく落ちるのが不思議なようにも思われた。このようにして根もとに近いほうから順序正しくだんだんに脱落して行くの

であつた。

S君がまたベコニアを届けてくれた。大きさは前にT君からもらつたのと同じくらいであつた。しかし前のに比べて花の色も葉の色もいったいに薄くてなんとなくさびしかつた。そのかわりまたなんとなくあっさりした野の花のような趣はあつた。同じ種類の花でありながら培養の方法や周囲の状況の相違でこれほどにもちがつたものができるかと思つた。土の性質、肥料や水の供給、それから光線や温度の関係で同じ種から貴族と平民が生まれるのであつた。花の貴族と平民とは物を言わないから

争闘はない。こんな事を考えたりした。

次には〇君から浅い大きな鉢はちにいろいろの草花を寄せ植えにしたのを届けてくれた。中心になっっているのはやはりベコニアで、その周囲には緑色の紗しゃの片々と思うようなアスパラガスの葉が四方に広がり、その下から燃えるようなゼラニウムがのぞき、低い所にはアルヘイ糖のように蟹かにシヤボの花がいくつか鉢の縁にたれ下がっていた。一つ一つの花はきれいであるがこのように人工的に寄せ集めたところになんとなく物足りない不自然さがあった。しかしともかくもにぎやかに花やかなものであつ

た。眠られぬ夜中の数時間はこの花のためにもどれほどか短くされた。眠られぬままにいろいろな事を考えた中にも、N先生が病氣重態という報知を受けて見舞いに行った時の事を思い出した。あの時に江戸川えどがわの大曲おおまがりの花屋へ寄って求めたのがやはりベコニアであった。紙で包んだ花鉢をだいにぶら下げて車にも乗らず早稲田わせだまで持って行った。あのころからもうだいたい悪くなっていた自分の胃はその日は特に固く突っ張るようでした。苦しかった。あとから考えてみるとあの時分から自分の胃はもう少しずつ出血を始めていたのである。そうとも知らずわ

ずかの車賃を儉約するつもりで我慢して歩いて行った。重態の先生には面会は許されなかった。しかし持って行った花は夫人が病床へ運んでくれた。夫人はやがて病室から出て来て「きれいだなと言っていましたよ」と言った。考えてみるとこれが先生から間接にでも受けた最後の言葉であった。今自分は先生の生命を奪い去った病と同じ病で入院している。幸いに今度はたいして危険もなくて済みそうである。同じ季節に同じ病気をして同じベコニアの花を枕まくらもとに見るといふのは偶然の事といえは偶然であるが、よく考えてみたらそこに何かの必然の

因果があるのではないかという気がした。普通に偶然の暗合と見られる事でも、実はそうでない場合がかなりしばしばある。先生と弟子でしとの間にある共通な点があれば、それは単に精神的のもので、これが肉体の上に多少の影響を及ぼさないとはいわれぬ。あるいは逆に肉体に共通な点のあるのが原因でそれが精神に影響して二人の別々な人間の間には師弟の関係を生じる一つの因縁にならないとは限らぬ。もしそうだとすれば先生と弟子とが同じ病気にかかる確率プロバビリテイは、全く縁のない二人がそうなるより大きいかもしれない。病気が同じならば同じ時候

によけいに悪くなるのはむしろありそうな事である。こんな事を考えたりした。そしてその時にはこれがたいへんに確実な理論セオリーでもあるような気がしたのであった。

退院するころには蘭らんの花もすっかり枯れて葉ばかりになった。ポインセチアも頂上の赤い葉だけが鳥毛のようになつて残っていた。サイクラメンもおおかたしなびてしまった。しかしベコニアだけは三つとも色はあせながらもまだ咲き残っていた。それでともかくもみんな退院の荷車に載せて持ち帰るつもりでいたが、あいにくその日雨が降りだした、そして荷車には雨おおいがないとい

うので人力車で荷物を運ぶ事になった。それがために花鉢はちは皆残して行く事にした。看護婦に、迷惑だろうがどうにか始末をしてもらいたいと頼んだら「いただきます」と答えてニコニコしていたので安心した。ただO君からもらった寄せ植えの鉢はちだけはまだ花の色もあざやかであるから惜しいと言って、妻がひざの上のせて持ち帰った。しばらくはそれを応接間へ出してあったが、後には縁側の外の盆栽台に置かれたまま、毎夜の霜にさらされていた。ベコニアはすっかり枯れて茎だけが折れた杉すぎ箸ばしのようになり、蟹かにシヤボの花も葉もうだったようにべ

トベトに白くなって鉢はちにへばりついている。アスパラガスの紗しやのような葉だけはまだ一部分濃い緑を保って立っている。

三週間余り入院している間に自分の周囲にも内部にもいろいろの出来事が起こった。いろいろの書物を読んでいろいろの事も考えた。いろいろの人が来ているいろいろの光や影を自分の心の奥に投げ入れた。しかしそれについては別に何事も書き残しておくまいと思う。今こうしてただ病室をにぎわしてくれた花の事だけを書いてみると入院中の自分の生活のあらゆるものがこれで尽くされた

ような気がする。人が見たらなんでもないこの貧しい記録も自分にとってはあらゆる忘れがたい貴重な経験の総目次になるように思われる。

(大正九年五月、アララギ)

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著 者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館